

総合問題 (複)

(問題)

2024年度

〈2024 R06180015(総合問題 (複))〉

注意事項

1. 試験開始の指示があるまで、問題冊子および解答用紙には手を触れないこと。
2. 問題は2～8ページに記載されている。試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚損等に気付いた場合は、手を挙げて監督員に知らせること。
3. 解答はすべて、HBの黒鉛筆またはHBのシャープペンシルで記入すること。
4. 記述解答用紙記入上の注意
 - (1) 記述解答用紙の所定欄（2カ所）に、氏名および受験番号を正確に丁寧に記入すること。
 - (2) 所定欄以外に受験番号・氏名を記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。
 - (3) 受験番号の記入にあたっては、次の数字見本にしたがい、読みやすいように、正確に丁寧に記入すること。

数字見本	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9
------	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

5. 解答はすべて所定の解答欄に記入すること。所定欄以外に何かを記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。
6. 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが、どのページも切り離さないこと。
7. 試験終了の指示が出たら、すぐに解答をやめ、筆記用具を置き解答用紙を裏返しにすること。
8. いかなる場合でも、解答用紙は必ず提出すること。
9. 試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。

以下の【資料1】～【資料3】を読んで、問題1～問題5に答えなさい（資料には一部改変あり）。

問題1 【資料1】の主旨を300字以上350字以内で要約しなさい。

問題2 【資料2】は、ナショナリズム研究の分野で基本図書の一つとされる『想像の共同体』の著者ベネディクト・アンダーソンが2005年に早稲田大学で行った講義をめぐって、その講義を収録した書籍の編著者梅森直之が執筆した解説からの抜粋である。【資料2】の編著者は比較という行為について、とくに国や社会を比較することについて、どのように述べているか。要点を300字以上350字以内でまとめなさい。

問題3 【資料1】と【資料2】とを結びつけ、2つの資料の関連性をそれぞれの文章から具体的に引用することで指摘しつつ、科学のあるべき姿、および留意すべき点について、あなたの考えを400字以上500字以内で述べなさい。

問題4 【資料3】は、アンダーソンが自身の研究者としての歩みを振り返りながら比較の枠組みについて論じた文章である。下線部①及び下線部②を日本語に訳しなさい。

問題5 【資料3】でアンダーソンは、比較を行う際の留意点として4点を挙げている。そのうちの第4点を簡潔な日本語80字以内で説明しなさい。

【資料1】

本冊子の昨年夏号に、フィギュアスケートの採点方式の歴史は、「美と技をいかに客観的に測るか」についての人類の模索の歴史なのだと書いた。主観を取り除き、客観的に測りたい対象を数値にするのは大変難しいことだ。

ところで、ひとは数値にすると客観的であると思いこむ傾向がある。番組の視聴率、受験校の偏差値など、身近な数値はいろいろある。しかし、巷で流通している数値をそのまま信用するのではなく、一つの数値が定義されるその場面に立ち返って再考することが必要である。何を無視し、何を重要なものとするのか、何をノイズと判断し、何をシグナルとみなすか、その判断によって数値の近似の仕方や算出の仮定が異なり、数値の値そのものも変わる。そのような近似と仮定のプロセスを考慮せずに算出された数値そのものを客観的で、どこにでも通用するグローバルなものとしてとらえるのは誤りであろう。

それではなぜ、そのような数値が客観的とみなされて流通してしまうのであろうか。科学史家セオドア・M・ポーターは、なぜ人類が数値を客観的とみなすのかの理由を分析した。グローバル化がすすみ、遠く離れた地域の人々とモノや知識の交易をすすめようとするときには、個人に由来した知識や地域に依存した知識は使いにくくなる。そういうときに交易や交流の標準化に役立つのが数値である。ローカルノレッジが通用しなくなると、標準化が求められ、新しい信頼の技術として数が登場する。その意味で、数字とは「没個人化」「非人格化」（原語は *impersonality*）の道具なのである。

例をあげよう。十八世紀のヨーロッパでは町役場にはよく、その地域で通用する1ブッシェル（質量単位で27.2キログラム）の容器が陳列されていた。これは小麦やオート麦を交換するときの単位であった。小麦はオート麦より高く評価されていたので、通常は平らにしたときの尺度で交換された。一方、オート麦は山盛りで売られていた。産業革命以前の世界では、すべての地域が、ときにはすべての村が、独自の尺度をもっていた。しかし、交易網がより大規模になるにつれ、尺度を統一する必要性がでてきた。ヨーロッパ大陸ではフランス革命が統一した尺度をつくり上げるうえで契機となった。計測における平等を保障するために、政治的な革命がメートル法の浸透に役立った。正確で統一された尺度が、経済を特権による秩序から法律の支配へと移行させたのである。メートル法は、現場の農民のために考案されたものではない。メートル法は、真のブッシェルを地方に持ち帰ったのではなく、ブッシェルを捨てて完全になじみのない量と名前によるシステムを選ばせた。

この例において、各地方のブッシェルは地方によって異なるため、遠く離れた地域との交易には使えない。ブッシェルというローカルノレッジが通用しなくなると、標準化が求められ、メートル法という新しい信頼の技術が登場したのである。メートル法はその意味で没個人化の道具である。

このように、没個人化・非人格化の道具が「数値」なのである。では何故、社会のなかで定量化がすすむのであろうか。ふだん、定量化とは、不当な政治的圧力が加わらなければ、客観性を追求するために推進されると言われている。

る。しかし、史実の分析から、実は逆であることが判明した。定量化とは、力をもつ部外者が専門性に対して疑いの目をむけたときにこそ、発生するのである。政治的圧力さえなければ客観性が保てるのではなく、圧力にさらされてこそ、その適応として客観性がつくられるのである。

とくに二十世紀初頭の米国の保険数理士のおかれた状況を分析するとそれがよくわかる。米国の当時の文化状況は、量的な計算手続きのほうが信頼されたのであり、専門家判断は信頼されなかった。計測の尺度や手続きの規格化による客観化によって合意に至ることが、政府の官僚や外部者たちに対するもっとも強力な防衛となった。つまり、政治的圧力に対抗するために定量化が用いられたのである。それに対し、十九世紀半ばの英国の保険数理士たちは、政府の標準化の圧力に対して自らの専門性を守ることに成功した。英国の政治秩序は十分に階層的であり、客観性や正確さといったものよりも信頼や敬意に拠っていた。紳士であることに敬意と信頼が払われ、標準化された計算・没個人的規則よりも紳士の判断のほうが重要だったのである。同様にフランスにおいても、エコール・ポリテクニク（フランスの高等教育研究機関。トップクラスの理工系大学の一つ）出身者であることに敬意と信頼が払われ、「ただの計算」（標準化された計算・没個人的規則）よりもエリートの判断および自由裁量のほうが重要であった。

生徒を類別するためのIQテストや、公衆の意見を定量化するための世論調査、薬を認可するための洗練された統計手法や、公共事業を評価するための費用便益分析やリスク分析、これらはすべて、米国の科学および米国文化独特の産物である。つまり、建国の歴史も浅く、専門家がエリートとして信頼されることのない米国社会で、市民からの疑いの目や社会からの圧力に対抗するために、これらの定量化は発展したのである。

（藤垣裕子「科学と社会を考える 第9回」『白水社の本棚』2023年春号）

【資料2】

すでに幾度か見たように、『想像の共同体』に続くアンダーソンの著作のタイトルは、一九世紀末に活躍したフィリピン思想家であり革命家、ホセ・リサールの著作の一節から取られている。『比較の亡霊』という謎めいたタイトルだ。そしてこのタイトルは、アンダーソンが、『想像の共同体』以後に踏み出した新しい歴史の方法を、象徴的に示す標語ともなっている。

「比較の亡霊」という言葉は、リサールの優れたナショナリズム小説『ノリ・メ・タンヘレ』のなかに登場する。この小説の舞台は、一九世紀後半のフィリピンであり、物語は、裕福でハンサムな青年メスティーンである主人公イルバラが、スペイン帝国主義の圧政から祖国を解放するという理想に燃えて、長期にわたるヨーロッパ留学から帰国するところからはじまる。そして当該の言葉は、リサール自身を色濃く投影したこの主人公が、帰国間もない時期に、マニラの街を馬車のなかから眺めるその一シーンのなかに、ひっそりと次のように挿入されている。

そこは雑多な人々が群れ集う繁華街である。それぞれの衣装を身にまとったヨーロッパ人、中国人、現地人たち、行商人、半裸の運び屋、屋台、宿屋、食堂、商店、牛車を引く水牛、騒音と運動、陽の光、強烈な匂い、混じり合う色彩……。そうした景色を眺めながら、イルバラは、知らず知らずのうちに、微笑みながら、少年時代の追想に浸る。

しかし「植物園が見えてくると、彼の楽しい追想も消え去ってしまった。比較の亡霊が、彼をヨーロッパの植物園に連れ去ったからである」。ここでイルバラは、植物の葉を茂らせ、つぼみを開かせるために多くの努力とお金がかかっているヨーロッパの植物園を思い出す。そこは植民地から来た人間にとって、豪華で、周到に手入れされた公共の空間であった。

植物園から目を背けたイルバラの目に、壁と壕で囲まれ、まるで「祖母の時代のドレスをまとった生気のない若い娘」のような古いマニラの街並みが広がる。イルバラは考える。「海の向こうにヨーロッパがある。多くの美しい国々。つねなる激動のなかで、幸福を求め、夢とともに目覚め、失望とともに眠る……。彼らはその破滅のただ中で幸せなのだ。そして海のこちらには、霊的な人々がいる。彼らは、物事を責めたりはしないが、霊を崇拜すると自称する人々よりも、遥かに霊的であろう」。

アンダーソンは、こうした印象的なリサールの記述に、次のようなコメントを加えている。「このことばによってリサールが言おうとしたのは、ひとたびそれに触れたら、以後はけっしてマニラのことを同時に考えずにはベルリンを体験できず、ベルリンのことを考えずにはマニラを体験できなくさせてしまう新しい不安定な二重性の意識のことである」。アンダーソンはまた、「東南アジア」のフィールドにおいて、彼自身もまた、こうした「めまいのような」感覚に見舞われた経験について記している。アンダーソンは、自らに取り憑いたこの「比較の亡霊」を悪魔祓いしようとはしない。むしろ彼が試みたのは、すべての歴史を、この「亡霊」の視点から、すなわち二重性の意識において見直してみることであった。いわば彼自身が「比較の亡霊」となって、読者を「不安定な二重性の意識」に誘うことが目ざされたのである。

「比較の亡霊」とは何か。その正体を明らかにする鍵は、通常われわれがどのような操作で、「比較」しているかを見つめ直してやることだ。何かを比較するためには、どうしても必要なものが二つある。その第一は、比較する対象である。ミカンとリンゴ、商社マンとフリーター、日本とアメリカ。これらの対象が存在してはじめて、僕たちはそのあいだを比較することができる。

次に必要なものは、共通の「ものさし」である。色、重さ、甘さ……、こうした特定の尺度に照らすことでミカンとリンゴという異なる果物は比較可能になる。人間とて同じことだ。本来かけがえのない個人同士がそれでも比較可能となるのは、成績や年収といった共通の「ものさし」で測られる限りにおいてである。国や社会を対象とする社会科学も、いろいろな「ものさし」で、さまざまな対象を測っている点においては日常生活における比較の場合とそれほど異なっているわけではない。

しかしながら、国や社会を比較する場合と、ミカンとリンゴを比較する場合とは異なる点もある。その第一は、ミカンやリンゴが、具体的な個物として外界から明確に区別されているのに対し、国や社会は、そのような物理的境界を持たないことである。

国や社会の境界は、ミカンやリンゴの場合とは異なって、あくまでも人間があたまのなかで引いたものだ。国境線に出かけてみたところで、そこに地図帳の赤いラインが物理的に存在しているわけではない。だから比較するという行為は、その想像の境界を受け入れ、比較の対象を作り出すところからはじまる。比較という行為自体が、国や社会という想像の共同体を生みだしてゆく営為の重要な一部であるというわけだ。

そもそも比較するという行為には目的がある。それは比較されるもののあいだに、順番をつけることだ。そのさい、比較されるもの（ちょっと専門家っぽくデータと呼んでみよう）には、通常二つの種類がある。一つめは、純粹に客観的な数字（定量的データ）である。色や重さや甘さ（果物の場合）、成績や年収（個人の場合）、人口、面積、識字率、GDP（国の場合）……。こうした数字が定量的データの具体例である。

二つめは、対象の性質の評価を含むもの（定性的データ）である。民主化や近代化の程度を比較する場合、この種のデータの解釈が、重要になることが多い。国や社会を比較する場合と、ミカンとリンゴを比較する場合では、「ものさし」の使い方も異なってくる。「このミカンとこのリンゴ、どちらが重いでしょう」。こうした比較には、正確な秤さえあれば、簡単に答えることができる。「日本とアメリカ、さてどちらが大きいでしょう」。こうした量的比較の場合も答えは一つしかない。では、「日本とアメリカ、さてどちらが民主的でしょう」。こうした質的比較に答えることは非常にむずかしい。民主化の度合いを測る「ものさし」は、けっして一つではないからだ。

しかしながら、国家や社会を対象とする比較の場合、僕たちが関心を持つのは多くの場合こうした質的な比較である。量的な比較の場合と異なって、質的比較の場合には、誰が、どのように「ものさし」を作るかが、決定的に重要な意味を持つ。

国や社会を比較するということは、人びとの集団を区切り、その集団に順列を付けるということだ。区切るものと区切られるもの、序列をつけるものとつけられるもの、この二者が存在してはじめて、比較という実践が成り立つ。

ここで重要なのは、この比較という実践が、けっして平等でも互換的でもないことである。なぜなら、ある国や集団は、圧倒的に比較する側にあり、他の国や集団は、つねに比較される側であり続けるということが社会科学の通例であったからだ。学問といえども力の一種である。力の強い国や集団の学問は、必然的に大きな影響力を持つ。そして現代社会において、そうした強い力を持った国や集団といえば、いうまでもなく西ヨーロッパとアメリカである。

これは結局のところ、西ヨーロッパとアメリカの学問が、他の国や社会を区切り序列化する地位にあったということだ。それは別言すれば、かれらがかれらの「ものさし」で、他の国や社会を測ってきたということだ。かれらの「ものさし」は、当然のことながらかれらの経験に基づいて構成されている。つまり、彼らの国や社会のあり方こそが、標準とみなされてきたということなのだ。

これまで多くの比較研究は、それぞれの国や社会の特徴を明らかにするというよりも、当該の国や社会が、西洋の国や社会のあり方からどれほど逸脱しているかを実際に測ってきた。そしてその逸脱の程度を、時間軸を利用して序列化したものが、近代化論と呼ばれるものさしである。

このものさしのからくりは、多様に存在する空間的な差異を、時間的な遅れとして、一元的に説明することにある。西洋の国や社会のあり方により近い国や社会は、より近代的だと評価され、そうでない国や社会は、より近代的でない位置づけられる。一九四五年、連合軍最高司令官として日本統治の重責を担うことになったアメリカのマッカーサー将軍は、当時の日本の民主主義の成熟度を評し、アメリカがもう四〇代なのに対して日本はまだ一二歳の少年であると述べた。そして現在多くの人が、現代の中国を、高度経済成長時代の日本の姿と重ねあわそうとしている。こ

れが近代化論と呼ばれるパラダイムのはたらきである。

「比較の亡霊」は、こうした近代化論的な比較の論理が現実に破綻するところにあられる。なぜ、そしてどのように近代化論は破綻するのか。それは実際の人々の生活が、境界によって分けられるものでも、異なる時間を生きるものでもないからだ。フィリピンは、ドイツと別の世界に存在しているわけではない。それは海を隔ててつながっている。だからフィリピンはドイツの過去でなく、ドイツはフィリピンの未来でもない。マニラの雑踏とヨーロッパの植物園は、ともにいまという同じ時間に存在しているのだ。

僕たちは、いまという同じ時間を、世界の人々とつながりながら生きている。近代化論的な比較は、そのつながりを境界によって分断し、いまという同じ時間を近代と前近代という異なる歴史へわりあてる。「比較の亡霊」が出現するのは、まさにこの瞬間である。境界によって分断され、異なる時間へと追いやられた人々のつながりが、現実のなかで回帰する。すなわち「比較の亡霊」とは、近代化論的な比較により抑圧されたグローバルな現実そのものを意味している。

(梅森直之編著『ベネディクト・アンダーソン グローバリゼーションを語る』光文社、2007年)

【資料3】

It is important to recognise that comparison is not a method or even an academic technique; rather, it is a discursive strategy. There are a few important points to bear in mind when one wants to make a comparison. First of all, one has to decide, in any given work, whether one is mainly after similarities or differences. It is very difficult, for example, to say, let alone prove, that Japan and China or Korea are basically similar or basically different. Either case could be made, depending on one's angle of vision, one's framework, and the conclusions towards which one intends to move. (In the jingoist years on the eve of the First World War, when Germans and Frenchmen were encouraged to hate each other, the great Austro-Marxist theoretician Otto Bauer enjoyed baiting both sides by saying that contemporary Parisians and Berliners had far more in common than either had with their respective medieval ancestors.) Here I have tried, as perhaps offering a useful example, to show how the comparative works I wrote between the early 1970s and the 2000s reflected, in their real difference, changing perspectives, framings and (political) intentions.

A second point is that, within the limits of plausible argument, the most instructive comparisons (whether of difference or similarity) are those that surprise. No Japanese will be surprised by a comparison with China, since it has been made for centuries, the path is well trodden, and people usually have their minds made up already. But a comparison of Japan with Austria or Mexico might catch the reader off her guard.

A third reflection is that longitudinal comparisons of the same country over a long stretch of time are at least as important as cross-national comparisons. One reason for this has to do with the power of a certain kind of textbook-style national history that doesn't disdain myths and has a vested interest in continuity and perpetuating an ancient 'national identity'. Scots who want to believe and insist that they have long been oppressed by the English do not like to be reminded that London was ruled by a Scottish dynasty through most of the 17th century; likewise many Japanese do not take kindly to the suggestion that their country's earliest 'emperors' may have been partly Korean in origin. Hence scholars can profit immensely by reading widely in ancient history.

A fourth point is that it is good to think about one's own circumstances, class position, gender, level and type of education, age, mother language etc when doing comparisons. But these things can change. When you start to live in a country whose language you understand barely or not at all, you are obviously not in a good position to think comparatively, because you have little access to the local culture. You feel linguistically deprived, lonely and even isolated, and you hunt around for some fellow nationals to stick with. You cannot avoid making comparisons, but these are likely to be superficial and naive. Then, if you are lucky, you cross the language wall, and find yourself in another world. You are like an explorer, and try to notice and think about everything in a way you would never do at home, where so much is taken for granted. What you will start to notice, if your ears and eyes are open, are the things you can't see or hear. You will begin to notice what is not there as well as what is there,

just as you will become aware of what is unwritten as well as what is written. And this works both for the country you are living in and the one from which you came. Often it starts with words. Indonesian, for example, has a special word, *gurih*, for the taste of rice ('deliciously pungent' according to one dictionary). If you come from England, you are then startled to realise that the taste of rice can't be described with a designated English word. On the other hand, Indonesian has no word like the English 'sepia' for the colour of old photographs. The same is true of concepts. Javanese has a word, *longan*, for the empty space under a chair or bed, which English does not.

Such a period of struggling with a new language is especially good for training oneself to be seriously comparative, because there is not yet any automatic translation of foreign words into the language in your head. You gradually get to know enough to notice more, and yet you are still an outsider. If you then stay on long enough, things get taken for granted again, as they were back home, and you tend to be much less curious and observant than before—you start to say to yourself: 'I know Indonesia inside out.'

② The point being that good comparisons often come from the experience of strangeness and absences.

(Benedict Anderson, "Frameworks of Comparison", *London Review of Books*, Vol.38, No.2, 2016)

※ページ下部に出典を追記しております。

出題者注

discursive : discourse の形容詞形 / jingoist : 好戦的愛国主義者 / plausible : 妥当と見なせる /

observant : 観察眼の鋭い

